

Building lifestyle around Ferrari

ジュネーブ・ショーに向かう車中にて

モーターショーは何が起きるかわからない。そんなライブ感が楽しい……とはいうものの、予想と外れて誌面に影響が出ることは多々ある。今回はそんなお話。



ラノを出発し、F8トリブートがデビューするジュネーブへ向かう3月4日、ユーロトレインの車内でこれを書いている。

今はスイスの国境を越えたあたりで、左右には冠雪したモンブラン山脈が広がり、隣の食堂車からは賑やかなイタリア人の笑い声がする。4時間ほどの行程はまあまあ車内も揺れるため快適とは言い難いが、不満を感じるレベルではない。たまたま座った席の周辺が空いていることも無関係ではないかもしれないが(写真は書き終えた後に撮った窓ごしのレマン湖)。

1年前に乗った時は食堂車にも入ったが、イタリア発の車両なのにパスタがアルデンテでないことに閉口して、今年はホテル隣のスーパーで昼食を買い出してきた。時間がなくて、ぱっと目に入った巻物寿司を買ったのだがこれが大失敗。よく見たら"スパイシーロール"と書いてあり、何と唐辛子入り！あまりに辛くて仕方なくお土産に買ったチョコレートを食べたその場をしのいだ。

イタリアにはもう20年近く通っているが、たまにこうして失敗するものの、後で笑い話になりそうなことばかり。だって、彼らに悪気はないのだから。現地からフェイスブックに投稿したら、イタリアとフランスの違いについて質問を受けたのだが、そこでとっさに書いた答えは、『フランス人は論理的、イタリア人は感覚的』だった。フランス人は日本人からすると独特のロジックを持っているように見えて、だからこそ往年のシト

ロエンDSのような奇想天外なクルマが生まれる。一方のイタリアは、人を楽しませる天才。感覚的に作ったクルマは小さなハッチバックからフェラーリのようなスポーツカーまで、運転していて高揚感を覚えさせるものばかりだ。だから私はイタリア車が大好きだし、それを生み出すイタリアの文化や人も大好き。ここ数年、モーターショーの前後にイタリアへ立ち寄り取材をすることが多くなっているのは、フェラーリという"文化"を生み出すイタリアの今を、常に肌で感じておきたいから。それはフェラーリ専門誌を担当するものの矜持と言えるものだ。

実は白状すれば、F8トリブートと車名が発表された新型V8ミッドシップが公開されるまで私は、てっきりフルモデルチェンジだと思っていた。1989年に348、1999年に360、2009年に458がデビューしているため、今年は10年周期の法則でプランニューの新型が出ると思い込み、"新型V8"がデビューするという噂を本国ルートから入手したことで、実はそのための特別誌面になっていた。F8トリブートを否定する気は毛頭ないが、"そう来たか〜"と驚いたことも否定しない。そして好事魔多し。出国直前のある取材が諸事情でキャンセルとなり、誌面の大幅な練り直しが必要になった。

いつもは最後に書くこのコラムを最初にも書こうと思ったのは、まずは全てをリセットしようと思ったからだ。発売まで1ヵ月を切ったこのタイミングから、果たしてどこまで誌面を練り上げることができるのか。そうだ、今回取材した次号用のあの記事も入れてしまおう。出し惜しみするのはやめよう。全ページに全力を。皆さんに、そう、人を楽しませる天才であるイタリア人よろしく、できるだけ楽しんで頂くために。それもまた、エディター平井大介の矜持なのである。

